

YO-U

瓔



2019. 12. Vol.19 No.4 Winter

投句欄

勾玉集

いろは

地球儀をくるりと回し秋憂う
編み笠を覗くの禁ず風の盆
留袖をたたみほっこり星祭り

采野久美子

秋の宵大阪ミナミわちゃわちゃと
4 Bでくるんくるんとマスカット
秋の朝お粥の上にトッピンダ

太田沙良

恋ごころまだあるかもね赤とんぼ
突きあたり右に右にと曲がり秋
悼京アニ秋の光が降ってます

大槻春美

灯火親し座敷わらしのこそこそと
本を読む独りの夜更けちんちろりん
お岩さま宙吊りになる秋歌舞伎

小川礼子

ぎんなんの乳房のごとくしなだれり
幽けきは今宵の月の渡る音
翻る紅絹の紅さや秋の風

高貴美子

岩村駅から半分青い蛇
きつつきつつくきつつくつつかあの子
時間軸戻せるものにばったんこ

後藤晴美

つんのめるつち一面の銀木犀
柿を取る八十翁の物語語
人訪うて別れる時の藤袴

勾玉集を読む



はしもと風里

編み笠を覗くの禁ず風の盆

いろは

夜目遠目笠の内ですもの。覗かないでね。

○秋の宵大阪ミナミわちゃわちゃと

久美子

ミナミの喧騒がわちゃわちゃで全て伝わります。

○悼京ア二秋の光が降ってます

沙良

哀しみを包みこむやわらかな秋の光。悼京ア二。

灯火親し座敷わらしのこそこそと

春美

なかなか姿を見せてくれませんが多分その辺に。

○幽けきは今宵の月の渡る音

礼子

もうあんな処に。月の渡る音を感じながら。

○きつつきつつきつつきつつくあの子

貴美子

見事十七文字。あの子はだーれ。

つんのめるつち一面の銀木屋

晴美

白い小花が地を埋める。つんのめるならここで。

○このごろは忘れ上手ですいつちよん

千重子

忘れ上手。ははあこんなふうに見える、ね。

○帰宅部の石丸君の秋澄んで

由紀子

石丸君の放課後、まんざらでもなさそう。

○残業やビルの谷間の晩夏光

好美

残業あとの晩夏光がまぶしい。

百日紅人は死んでも咲きつづけ

信子

美しいと思い、痛ましいと思ひ。

○涼しさやささみしつとり茹で上がる

保江

こんなに美味しそうにささみを詠めるなんて。

飛ばし読む記事や残暑の朝ご飯

ますみ

せわしい朝ご飯の様子が見えるようです。

○金色のクリームトの恋鉦叩

多津子

はなやかなクリームトと密やかな鉦叩の取合わせ。

○柿の昼介護施設の戦中派

夏子

戦中派が効いています。

騒がしい仏間また良し孟蘭盆会

和代

いつも閉じられた仏間が今日は賑やかで。

秋雨や夫と腕組むミラボー橋

ひむれ

秋雨のミラボー橋。ロマンチックな思い出ね。

ハロウインの孫はマントを着せられて

了子

着てではなく着せられて。ほほえましいこと。

曼殊沙華紅白なればめでたきや

一代

赤い曼殊沙華は不穏でさえあるのに紅白揃えば。

○コスモスは空に憧れ風慕い

くみこ

私がコスモスだったならと思いつきました。

○見合いなどまっぴらごめん蛇穴に

美津子

潔し。

○ストレスはカラッと揚げて夕涼み

洋子

はーなるほど。その都度処理してためない。

中骨の透けて秋刀魚のカルパッチョ

さくら

中骨がちよと気になりますが、美味しそう。

こはれゆく地球

はしもと 風里

窓の百合日ごと雄しべに汚されて
ユーミンを聴く日窓辺に小さき百合
おとうとの文字伸びやかや昼の月
月明のぼんのくぼなり触れたかり
おとこの邪気なき声や月の庭
柿赤くじわじわこはれゆく地球
宵闇や忘れてをらず恋ごころ
深秋の全身で聴くジャズピアノ
暴風に耐へる大樹や星の夜
長き夜のドレミの歌は空耳か

さはし柿

辻 水音

月震ふ焼酎一升プラボトル

新涼や生真面目に咲く万華鏡

鳳仙花新しい歯を手に入れて

福助の出窓に褪せて望の月

燈火親しSFものは兄の本

牛鳴けば犬がつれ鳴くさはし柿

仏壇にへそくり仕舞ひ柿食らふ

ずず玉を採る間パン種を寝かせ

オテ・フセを強要されてゐる檸檬

秋出水鴨居に赤きランドセル

九月のエンドロー

波戸辺 のぼら

大津絵の鬼踏んづけて花野道

湖風やレモンの実る遊歩道

初紅葉みんな元気でいましょうね

金堂は秘仏公開椿の実

月さやかタカラジェンヌの付け捷毛

父がいた母がいた柿が実った

友だちが露転がして駆けてくる

亡き人数多九月のエンドロール

青空を葬送のごと鳥渡る

出すあてのない手紙書く星月夜

宙の駅

つじ あきこ

ああ空が高いよ映画みに行く日
露の玉ころがしている朝のバス
手渡して手紙が届く秋の風
言葉にはできないことば蜉蝣の
置手紙読むようにくる賢治の忌
無花果をもぐ泥んこのユニホーム
椎の実を転がしている僕の足
コーンスープ三日で届く宙の駅
泡立草やさしい人は疲れるよ
生真面目な兄の冗談辛木犀

万葉粥

笹村 ルル

鹿に会ひに行くと決めれば絶対に
座席みな車掌方向山粧ふ

秋うらら人につられて下るる駅

シヨルダーに入り口六つ木の実降る

飛火野といふ大いなる秋気かな

鷺原道やつぱり鹿は野生なり

身に入むや角切り終へし角の跡

前足を綺麗にたたみ雄鹿伏す

匙長き万葉粥に栗と芋

電車軋めば鹿の鳴き声かと思ふ

曼珠沙華

たかはし すなお

地図にない家に七年葉鶏頭

対岸に友がいました初もみじ

無人駅集札箱の秋思かな

名月や友の消えゆくコロツケ屋

放屁虫ここは本山園城寺

我こそは雑で一番地虫鳴く

秋の空白い齒目立つ園児たち

応援の声の幼さいわし雲

もう友はグレーヘアか曼珠沙華

実験の煙むらさき星月夜

たっぷん

火箱 ひろ

ハッシユタゲ
#

草むら夏の忘れもの

ねころべば露草の青空の青

秋天をキリンの首が下りてくる

マスカット子どものボクの見た未来

あかんぼのほつぺたほめてあかとんぼ

小鳥くるときどき会っていい関係

淡海の風を育てている芒

さざ波たぷん秋思たっぷん七十歳

琵琶湖から坂道ばかり蛇穴に

四人いて一瞬ひとりになる花野